

安史の乱

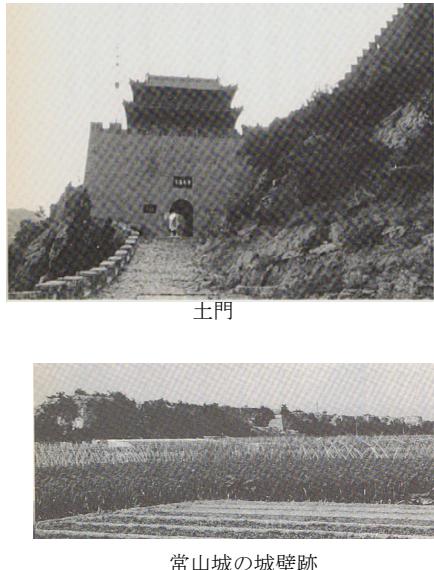
（755～763年にかけて河北の軍閥安禄山とその部下の史思明のおこした叛乱である）

あんし
あんろくざん

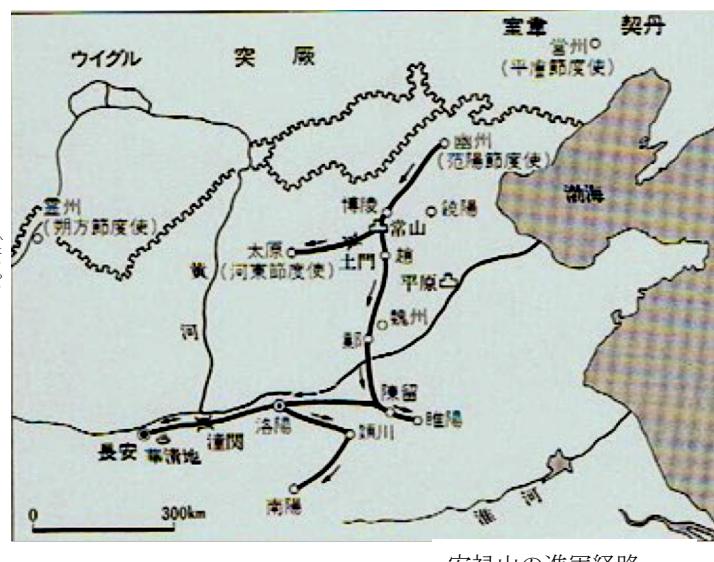
ししめい
ししめい

はんよう
はんよう

「君側の奸楊國忠を討つ」を大義名分に 755年11月9日 安禄山は15万の大軍を率いて 范陽から出撃、南下して洛陽、長安を目指した。一日40キロの速さで南下し、12月1日には黄河の北岸に達した。12月13日洛陽が陥落し、反乱軍の力に圧倒された河北24郡のほとんどが戦わずして降った。それを聞いた玄宗皇帝はうろたえて「河北24郡には、一人も義士はおらぬのか」と嘆いた。そこへ顏真卿から伝令が届いた。「孤軍奮闘ながら、勤皇の志士を募り王朝の安寧に死力を尽くす覚悟」と。玄宗は「朕は顏真卿の顔も覚えていない。それなのに、顏真卿はこんなにも忠義を尽くしてくれるのか」と涙を流した。顏真卿は奇策により安禄山に奪われた土門（娘子關）を12月22日に奪還した。土門は太行山脈を東西に横切る唯一の山道である。土門が奪回されたことで賊に降っていた郡のうち18郡が唐に帰属した。この報告のため安禄山は長男の泉州を長安に遣わした。泉州は途中で太原の太守の王承業のもとに立ちより、卑劣なこの男に皇帝への文書をだましとられて署名を書きかえられ、土門解放の功績を横取りされてしまった。



常山城の城壁跡



安禄山の進軍経路

安禄山の片腕の史思明が北から、南から蔡希德が常山城に攻めてきた。いくら催促をしても太原の王承業は援軍を送らなかつた。手柄を横取りしたことがばれることを恐れたかららしい。顏季明は賊に捕まり川に沈められて殺された。



玄宗幸蜀図 部分

都は陥落した。玄宗71歳、在位45年である。6月14日馬嵬駅という宿場で近衛軍の兵士により楊国忠は殺された。6月13日玄宗四川に逃亡し、安禄山軍が長安に入城し

安禄山はなおも戦つたが兵糧が尽き常山城は陥落し1万余の兵は殺され、安禄山は洛陽に連行された。安禄山の前にひきすえられた安禄山は安禄山を罵倒した。怒り狂つた安禄山は、安禄山の舌を抜き、手足を切断し、その遺体を洛河の橋げたに縛りつけて晒しものにした。安禄山は手足を切断されても顔色ひとつ変えずに、安禄山を罵りつけた。そのあと、30人を超える顔一族が処刑された。756年元旦安禄山は洛陽で大燕聖武皇帝と称し皇帝になり、新政府を樹立した。6月8日潼関が占領される。

つづいて楊貴妃も殺された。38歳であった。

7月12日 肅宗(しゆくそう)、靈武(れいぶ)で即位し、玄宗(じょうこう)は上皇(じょうこう)になる。10月、顏真卿(がんしんきょう)は平原城を放棄し、南走。河北諸郡は史思明(ししみやう)の手に

帰した。757年1月5日安禄山は次男の安慶緒に洛陽で殺された。55歳であった。安慶緒皇帝を称す。10月に肅宗

は長安を回復した。史思明ら降伏。
758年史思明再び謀叛する。
しそうぎ
759年3月史思明、安慶緒を殺し、洛陽で大燕、皇

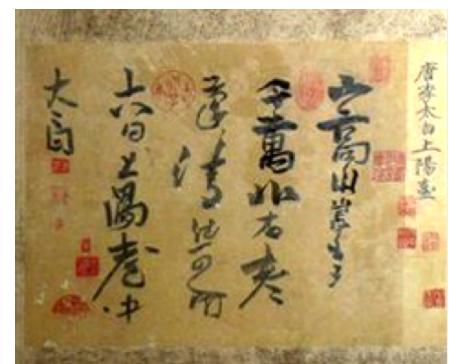
761年史思明、長男の史朝義に殺される。史朝義、大燕皇帝に即位。
762年唐軍洛陽を奪還。4月玄
帝を称した。

宗死去 78 歳であつた。13 日後 52 歳で肅宗死去。代宗即位。高力士死去。李白死去。763 年正月史朝義、部下の李懷仙

三分の二にあたる。



女官俑



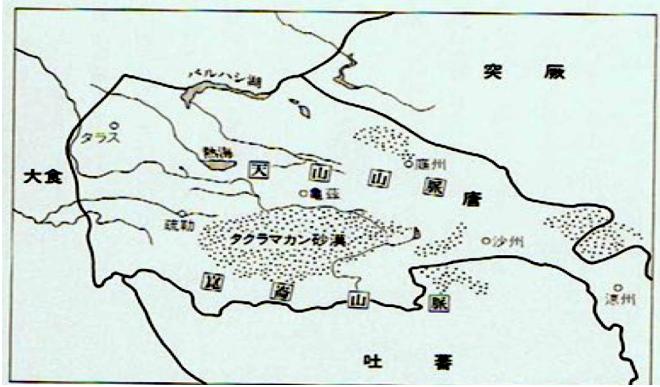
李白の真筆



平原城の城壁



十節度使 「瀘水の戦い」 751年



西域 「タラス川の戦い」 751 年



十節度使 「瀘水の戦い」 751年

祭姪文稿

（乾元元年9月・758）

顏真卿 49歳の行草書

「祭季明文」 「祭伯稿」とも。

山西省蒲州の普救寺で書かれた。

真跡である。

「姪」は「めい」ではなく甥のこと。

約6m×約29cmの巻子仕立てで多くの題跋・観記があり50近

い収藏印が押されている。本文は麻紙に約29×77cm 全23行269字

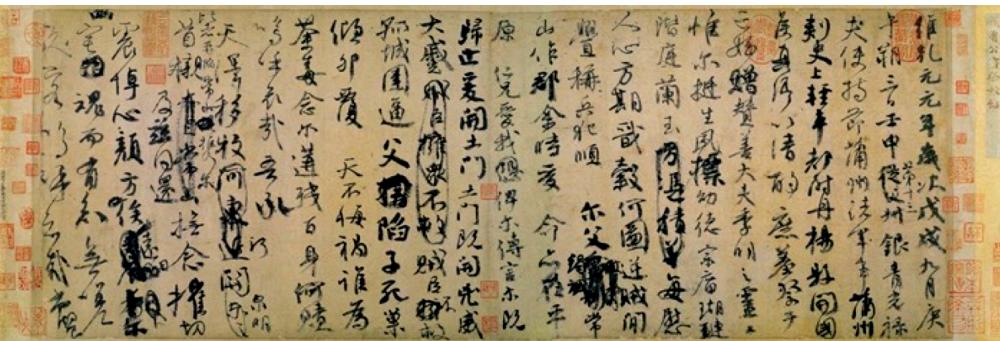
台北故宮博物院蔵。安史の乱で従兄の

顏季明と吳卿の末子の季明は惨殺された。その顏季明に捧げた弔辞の草稿。

「天下第一の行書である」（蘇軾）

「文章、字法、みなよく人の心を動かす」（黃庭堅）「人と書が一体となつた表現」などと評される。

悲しみや憤りが書の線にこめられている。書は正座して心閑に書くものであるという固定観念はどこから来たのか。顏真卿は、感情の起伏や耐え難い苦しみをことばにしつつ、ことばにできない悲憤を書線にこめることで、激しくやりばのない苦悩を乗り越えたのではないだろうか。王羲之が切り拓いた藝術としての書の伝統を顏真卿は正しく継承し、書は人間のあらゆる精神活動を表現できる最高の藝術であることを示唆した。



維
乾
元
元
年
歲
次
戊
戌
九
月
庚

午
朔
三
日
壬
申
第
十
三
叔
·
銀
青
光
祿
(大
夫)



側筆の部分と藏鋒（中鋒）の部分



(常) 山郡に太守となり私もその時に(命)を受けて、

山下郡余時文

文字の大小、
点画の太細、
運筆の緩急、
抑揚の変化と
調和。

土門を開く。土門既に開き、※土門は井陥口ともい。現在の娘子閑。

開土門土門吸閑

荼毒

荼毒

荼毒

門構え、土の変化。
単純な卒意の書とは思えない。

父陷胸元

父陷り子死し、

嗚呼哀しい哉

ああ
かな

天号移枝河東閑
首様本自常山移枝
還君後遠

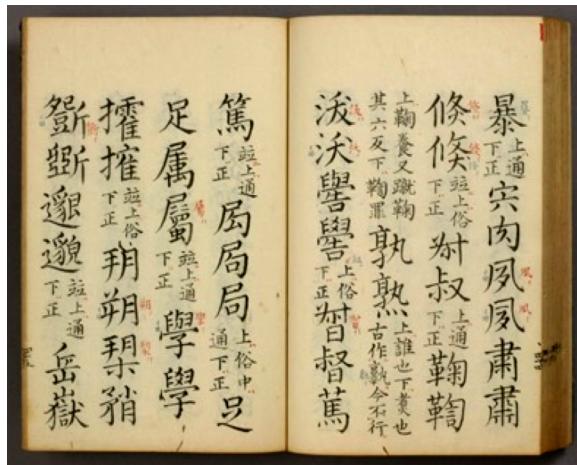
悲しみのあまり胸がつぶれ腸が断ち切れる」と)

私は天の恩恵をうけ、河閑に移つて民を治めるこ
とになつた。泉明が最近再び常山に行き、汝の首
を納めた棺を携え、ここにともに帰還した。哀れ
に思う気持ちで胸がはりさけ腸がちぎれ、死をい
たんで心と顔をふるわせるのである。ここに遠日
をまつて、爾が(幽宅を)トせんとす。(汝が安
らかに眠る家を占い定めようとしている)

接念摧切

心顔を震悼す。(死をいたんで心と顔をふるわせて悲しむ)と

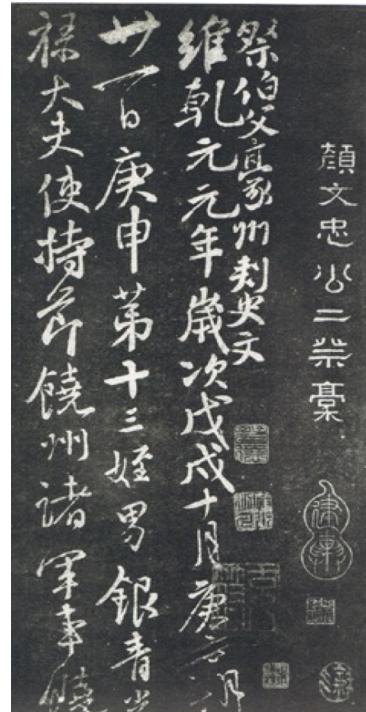
震悼心顔



『干禄字書』

顔元孫の箸書。楷書の字体を整理し標準字形をしめした字典。

のころの著か?



顏元孫は彦卿の父であり、顏真卿の育ての親である。当時顏真卿は一族の中心人物であった。真卿の命により果卿の長男の顏泉明は乱で難にあつた果卿の一族を身代金を払い蒲州に連れ帰つた。その人数は300余人で、真卿はその人らを養い、身の振り方をつけてやつと伝えられている。この時、泉明は常山から弟顏季明の首をもち帰り、長安の果卿の墓に合葬した。

祭伯文稿

(乾元元年10月・758) 真卿49歳の行草書

「祭伯稿」〔告伯父元孫文稿〕ともいう。全文40字。

真跡を米芾がみているが、現在は刻帖しかない。伯父顏元孫の靈を祭つたときの報告文の草稿である。

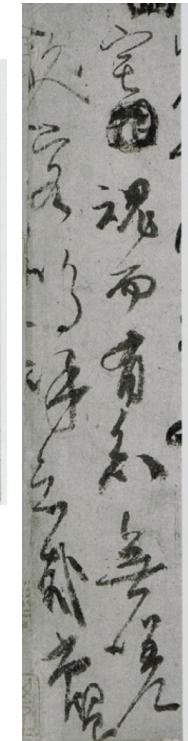
〔祭伯稿〕「告伯父元孫文稿」ともいう。全文401字。

758年3月真卿は蒲州（山西省）刺史となつたが、10月に饒州（江西省）刺史に転任させられた。その赴任の途中、洛陽にある元孫の墓前に乱で殉難した一族の者たちが朝廷より表彰されたことを報告した。



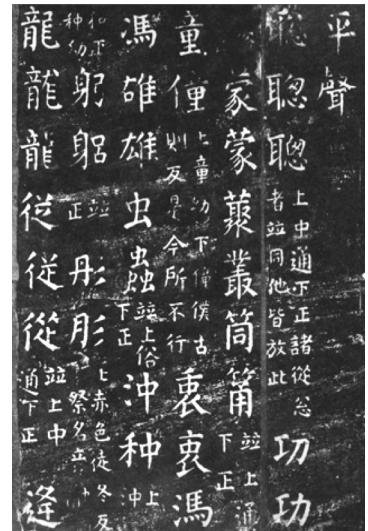
嗟く無かれ

嗚呼 哀しい哉



魂にして知る有れば、久しく寄せ
るを嗟く無かれ。嗚呼哀しいかな。
尚わくは饗けよ。

36



『顔氏字様』がんし じよう

一 残巻 敦煌発見（633年頃？）



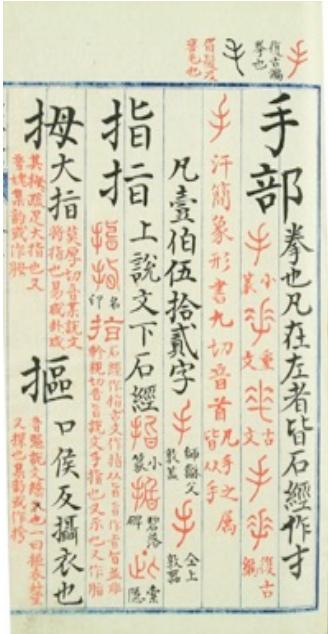
從
子
木
姓
楊
陸
昧
初
上
字
水
相
水
从

未	未	未	未
未	未	未	未
未	未	未	未
未	未	未	未
未	未	未	未



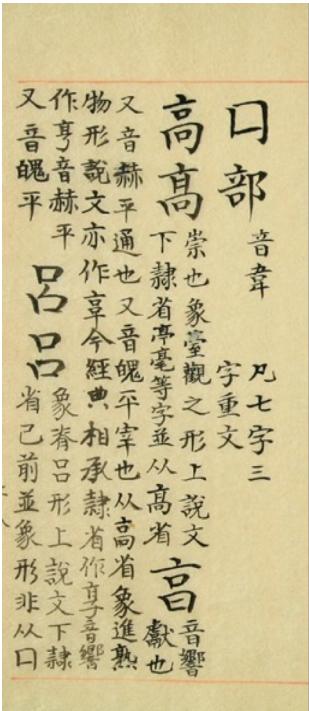
『五経文字』

（大歴11年・776）



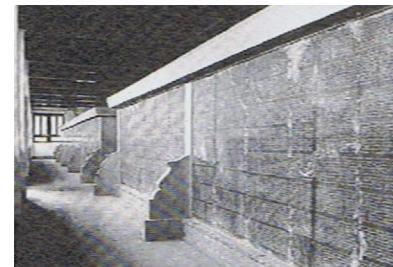
『九經字様』（太和7年・833
きゅうけいじよ

833



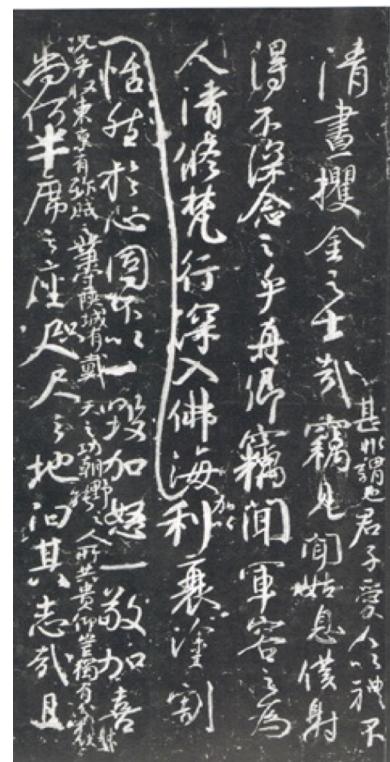
字典体の系統の文字はほとんどとかかれていた。初唐の楷書の中から正字を選ぼうとしていたからだと考えられる。この楷書は、初唐の完成以前の、やや偏平な字形である。

等慈寺碑
(顔師古
637
641年)



國之以九歌 地平天成 萬世永賴 汝禹朕宅 一載耄期倦

争坐位文稿 (広徳2年11月・764) 頭真卿55歳の行草書



「平成」の語源の「地平天成」(『尚書』卷第一虞書
大禹謨) が第10石2段目第16行に見える。

儒教の經典を7年がかりで刻した。13種の經典が
114枚の石の両面に刻されている。総字数65万字あ
まり。各石は高さ約217幅97cm。西安碑林藏。
熹平石經、正始石經につづく第3番目の石經で、『五
經文字』『九經字樣』などを基礎に作られた。長安
の太学に建てられ、科举での標準テキストに定めら
れたので大学生や文士たちが学んだ。その字体は、
これが一般に普及していった。

これから後の中国の学問や教育で使われる漢字の
基準となつた。開成石經の正字の基準は厳格であ
り、これが一般に普及していった。



者。半九十里。言

※「奇特」とすぐれていること(さま)。※「姿態」・形に趣があるさま。※「杜子美」・杜甫のこと。子美は字。
ふところが広く、ふつらとした中鋒藏鋒の線質や字形、自在に変化する字形、力強い線にこめられた感情
の流れ、筆の弾力を駆使した書きぶり、空画の大きな動き、章法の工夫(大小、細太、強弱の変化、余白など)
など学ぶことは限りない。

美の詩の如し」と述べている。

※「篆籀の氣」・篆書の用筆。※「詭異飛動して」・不思議なほどに飛動して連なり。※「意外」・人意を超えた筆意。
蘇軾は「公の他の書に比し、尤も奇特たり。手にまかせて自然、つねに姿態有り」「古法を一変すること、
篆籀の氣有り、顔書の第一」と為す。字は相い連属し、詭異飛動して、意外を得たり」

真蹟を米芾、蘇軾、黃庭堅らが見たと思われるが、刻帖しか現存しない。刻本は数種あるが、西安碑林にあ
る「開中本」(西安本)が有名である。米芾、蘇軾、黃庭堅はこれを行書の手本として習つてゐる。

「平淡天真」を書の理想とした米芾は、作為的として頭真卿の楷書を嫌つたが、この行書は激賞した。「篆籀
の氣有り、顔書の第一」と為す。字は相い連属し、詭異飛動して、意外を得たり」

書道 もろもろ塾 4-4

晚節末路之難也

天下莫與汝爭

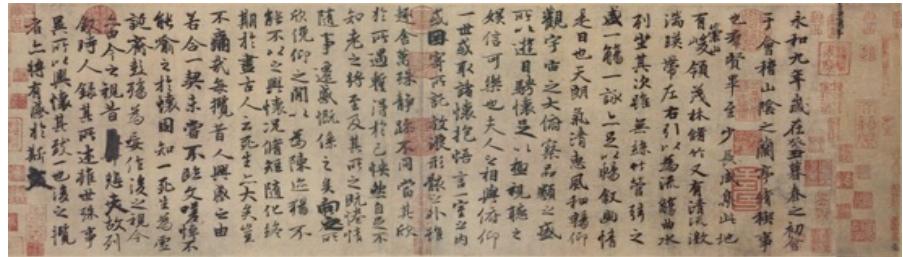
天下莫與汝爭

尚何半席之座

尚何半席之座

張旭十二意筆法記（天寶5載・746）伝・顏真卿38歳の行書 撰文も顏真卿

余罷秩體弱物詣京洛訪
金吾長史張公請師筆、嘗
長史天時在紫微室懸止有
羣衆師法之其筆法或存得
君謂曰神妙傑頃在長安三



王羲之・蘭亭序 (八柱第三本・神龍半印本) 353年

※『灌頂曆名』は弘仁3・4年（812年・813年）に空海が高雄の神護寺で灌頂を受けたときの受法者の名簿である。日本初の灌頂とされる。顔真卿の書風の影響が見られる卒意の書。空海が入唐した年（804）は顔真卿没後20年目である。

※「灌頂曆名」は弘仁3・4年（812年・813年）に空海が高雄の神護寺で灌頂を受けたときの受法者の名簿である。日本初の灌頂とされる。

くうかい かんじょうれきめい 空海・灌頂曆名

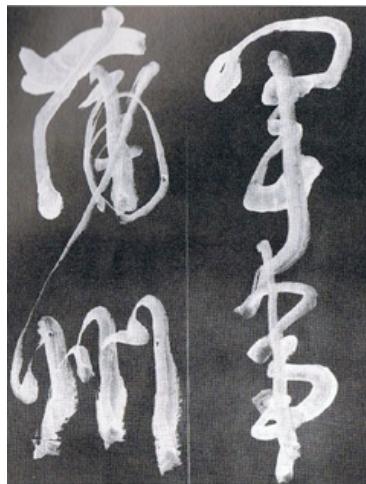


臨書例

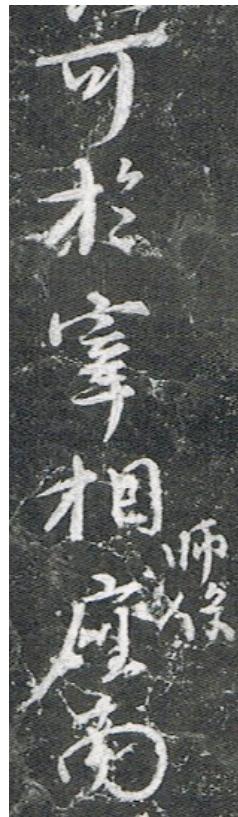
顏真卿の「祭姪文稿」「祭伯文稿」「争坐位文稿」は「三稿」とよばれ、多くの人びとに臨書されつづけている。残念ながら現存している真蹟は「祭姪文稿」のみである。刻帖では真はつかめないであろう。



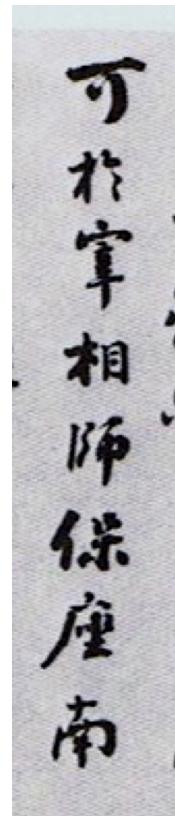
祭姪文稿



上田桑鳩



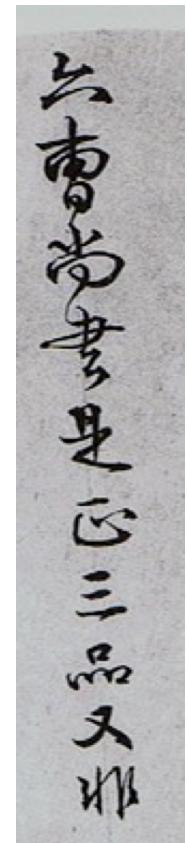
争坐位文稿



劉墉
りゅうよう



伊秉綬
いへいじゆ



争坐位文稿



争坐位文稿



手島右卿
こうかけだしたい
閣下蓋太